Preview

横尾忠則 大公開制作劇場

2019年1月26日〈土〉–5月6日〈月・振休〉

休館日：月曜日［ただし祝日・振替休日の場合は開館し、翌平日休館］
観覧料
一般700（550）円、大学生550（400）円、70歳以上350（250）円、高校生以下無料
※（　）内は20名以上の団体および前売料金
※障がいのある方（70歳以上除く）は各観覧料金の半額、その介護の方（1名）は無料

観客の前で作品をつくる公開制作は、横尾さんがしばしば行う制作方法の一つです。人に見られることでかえって余計な自我やこだわりが消え、無心状態で制作することができるという横尾さんにとって、公開制作は「描く」という肉体的行為を再認識するための格好の手段でした。
本展では、横尾さんがこれまでに公開制作で描いてきた作品を、映像・写真などの資料とともに紹介します。1980年代、画家へと転向したもののアトリエのなかった横尾さんが、制作できる場所を求めてやむなくとった手段が公開制作でした。しかし、人前で描くことで逆に迷いを捨てて集中できるという実感を得た横尾さんは、アトリエが完成した後も様々な場所で公開制作の機会を持つようになります。そして2000年、横尾さんの代表的シリーズとなる「Y字路」が描き始められると、以降、公開制作において「Y字路」は一つのフォーマットとして展開し、各地の美術館で開催される個展にあわせて、その土地にちなんだ“ご当地Y字路”が次々と生み出されていきました。そこではまた、横尾さん自身が仮装して制作するPCPPP（Public Costume Play Performance Painting）も行われるようになります。
横尾さんは公開制作を演劇にたとえています。舞台の上で起こる事件＝創造の現場を固唾をのんで見つめる観客と、その熱気やエネルギーを創造＝事件に利用する横尾さん。その間には、即興的でスリリングな共犯関係が成り立っているといえるでしょう。これら事件の現場を検証することで、横尾のさん制作に対する姿勢や創造のプロセス、その変遷を辿ります。

林 優｜本館学芸員

兵庫県立美術館｜展覧会スケジュール

特別展
Oh! マツリ☆ゴト　昭和・平成のヒーロー＆ピーポー
2019年1月12日〈土〉–3月17日〈日〉

県美プレミアム
小企画｜M氏コレクションによるJ・J・グランヴィル
特集｜類は友を呼ぶ
2018年11月17日〈土〉–2019年3月3日〈日〉

※兵庫県立美術館の特別展又は県美プレミアムの有料チケット半券ご提示で、
当館の企画展を団体割引料金でご覧いただけます（詳細はHPなどでご確認ください）

【関連イベント】

横尾忠則 公開制作

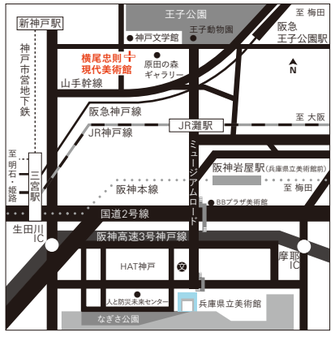
日時：1月26日〈土〉開館時間中随時
会場：当館オープンススタジオ
※観覧無料
※日程は変更される場合がありますのでHPなどでご確認ください

ワークショップ「重なるイロとカタチ」

日時：5月3日〈金〉13:30–16:00
会場：当館オープンスタジオ
対象：小学生以上
定員：20名
※要参加費

その他キュレーターズ・トークなどを開催予定です
各イベントの詳細は当館HPなどでご確認ください

当館での公開制作の様子（2012年）



開館時間
10:00–18:00
（展覧会開催中の金・土曜日は
10:00–20:00）
※入場は閉館の30分前まで
休館日
月曜日（祝日の場合は翌日）
年末年始　メンテナンス休館

facebook
twitter

Y+Tメールマガジン登録
www.ytmoca.jp/news/index.html

Y+T MOCA
〒657–0837 兵庫県神戸市灘区原田通3-8-30
Tel: 078-855-5607（総合案内）Fax: 078-806-3888
www.ytmoca.jp

編集後記
在庫一掃大放出展が終わり、オープンスタジオに響くチンドン屋の音色やはっぴを着たスタッフの姿もなくなり、
祭りの後の静けさのような少し寂しい気分です。しかし、しんみりとばかりもしていられません。
いよいよ来月からは横尾さんの公開制作の変遷を一挙に振り返る展覧会が開幕! 次号の特集もどうぞお楽しみに（尾﨑）

横尾忠則現代美術館ニュース Vol.20
2018年12月26日発行
編集・発行：横尾忠則現代美術館
印刷：岡村印刷工業株式会社

the Y+T Times

横尾忠則現代美術館ニュース

Yokoo Tadanori Museum of Contemporary Art *NEWS LETTER*

Special Report　横尾忠則　在庫一掃大放出展

Topics
01 横尾さんの展覧会をレポート!
02 最近の横尾さん

Column
インターンシップ & 博物館実習

Event Report
01 触れずに奏でるテルミンの音世界
02 ワークショップ「自画像であそぼう!」

Preview
横尾忠則　大公開制作劇場　〜本日、美術館で事件を起こす

Editor's Choice
アーカイブルーム・ぱんだかふぇ

Information
次回展関連イベント
兵庫県立美術館 展覧会スケジュール

20
2018.12.26

エントランスの様子。後日、ワークショップで提灯はカラフルに生まれ変わりました。

Special Report

兵庫県政
150周年記念事業

横尾忠則
在庫一掃大放出展

一風変わった名前の本展ですが、実は当初、全く別の展覧会を予定していました。既にオープンまで半年を切ったタイミングで、諸般の事情で突然延期になってしまったのです。

筆者「先生どうしましょう。時期的に美術館から作品借りるのはもう無理ですが…」

《終末的聖画安売》1998年 | Villa Magical 2014 蔵

横尾「そうなの？　じゃあ収蔵庫にある在庫でなんか考えといて」

なるほど、「在庫」かぁ…　というわけで、開館以来、当館で一度も展示したことのない作品のなかから出品作品を選んでみました。全77点のうち約20点は恐らく未発表という、マニアックなラインナップです。題して「在庫一掃大放出展」。貴重な作品をまるで叩き売りするみたいなタイトルなので（しませんけど）、生真面目なアーティストなら怒り出すかも知れません。しかし、そこは横尾さんです。「オモロイやんか。それなら絶対あの作品が要るわ。画面全部に"SALE"の字を書いたやつ」

“あの作品”《終末的聖画安売》は、長らく行方不明でした。ところが、まったく偶然、少し前にオークションに出たのです。ダメ元でオークション会社を通じて落札者にコンタクトしたところ、実は横尾さんの大ファンで、直前のお願いにも関わらず、快く作品を貸していただけることとなりました。この作品は「ルルドの聖母」を中心に、ノストラダムスや出口王仁三郎、エドガー・ケイシーら

作品の横にスタンプを押す横尾さん

スタンプのクローズ・アップ

終末思想にゆかりのある人々の肖像が配置されています。当初"SALE"の文字はなかったのですが、「こんな絵は売れないよ」と言われて奮起した横尾さんは、紙を切り抜いて型をつくり、画面全体に"SALE"を描き加えました。その結果、個展会場で真っ先にこの絵が売れた、という逸話が残っています。

美術館を特売会場に見立てた本展では、関連イベントとして本物のちんどん屋さんを招くこととなりました。大阪を拠点に活躍する「ちんどん通信社」さんによる、スペシャル・ライブの模様は次号で詳しくお伝えするとして、彼らはオープニングにもサプライズで登場し、開会式を盛り上げてくれました。

ちんどん通信社「ちんどん屋さんの思い出とか、何かありますか?」

横尾「絵に描いたことがあるんだけど、子どもの頃、大阪の親戚で魚屋をやってた“力松”というおじさんがいて、ちんどん屋さんを大勢引き連れて西脇の僕の家にやってきたことがあります。みんなでインチキ石鹸をこしらえて売り歩くんよ。友達には冷やかされるし、毎晩酒盛りして下品な宴会芸やるし、ホンマかなんかった」

昭和30年頃の「青空宣伝社」。
子供時代の横尾さんの実家に押しかけたのはこの人達かも!?

いきなり「ちんどん通信社」の面々に取り囲まれる横尾さん。右端が代表の林幸治郎さんです

このエピソードを聞いた「ちんどん通信社」の代表、林幸治郎さんには、はたと思い当たるフシがありました。林さんが若い頃に修行していた大阪のちんどん屋「青空宣伝社」の社長が、むかし石鹸をつくっていたことがある、と話していたそうなのです。つまり横尾さんの実家に押しかけたのは、「青空宣伝社」の面々だった可能性が高いのです!

実は、横尾さんの芸術とちんどん屋さんとは、深いところで繋がっているのかもしれません。フェイス・トゥ・フェイスで広報活動を行うちんどん屋さんの全盛期は、インターネットやテレビ、ラジオが普及するもっと以前の、1930年代から終戦後の1950年代頃でした。それはまさに、横尾さんが郷里の西脇で過ごした幼児期〜青年期とぴったり一致しています。横尾さんにとって、自身の幼少期の体験が創作のインスピレーション源であることはよく知られていますが、哀愁に満ちたちんどん屋さんの楽の音は、当時の雰囲気を我々に追体験させてくれる、タイムマシンのようなものなのかもしれません。

山本淳夫｜本館学芸課長

壁紙が貼れてなかったり、作品が立てかけてあったり、わざと未完成の展示

Topics 01 横尾さんの展覧会をレポート!

横尾忠則　幻花幻想幻画譚1974–1975

ギンザ・グラフィック・ギャラリー（東京）｜2018年9月5日–10月20日

横尾さんのグラフィック・ワークの傑作の一つ、『幻花』挿絵原画を紹介する展覧会が東京のギンザ・グラフィック・ギャラリーで開催されました。『幻花』は瀬戸内寂聴さんによる室町時代を舞台とした長編時代小説。1974年から75年にかけて東京新聞で連載され、横尾さんがその挿絵を手がけました。全371点に及ぶ挿絵原画は、2015年に当館で開催した「横尾忠則　幻花幻想幻画譚」でその全貌が初めて公開されましたが、東京での初のお披露目の舞台となった本展では、横尾さんによる2種類のポスターデザインや作家の平野啓一郎さんによる書き下ろしの序文などが加わり、当館とは一味違う展覧会として生まれ変わりました。

会場構成にも工夫が凝らされています。1階の黒い布張りの壁面に囲まれた空間は、モノクロの原画の繊細な線を引き立て、地階に下ると一転、貴族の邸宅を思わせる格子戸や衝立などが、物語の雰囲気を伝えます。鑑賞者を『幻花』の世界に誘うドラマティックな照明やBGMも、本展ならではの演出といえるでしょう。

会期中には平野さんと横尾さんによるトークショーが行われ、また、筆者も講師として出張ガイドツアーにお伺いし、多くの参加者に熱心にご聴講いただきました。最終の来場者数もギャラリーとしては異例の約12,500名を記録するなど、沢山の方々に『幻花』挿絵の魅力を感じて頂ける機会となりました。

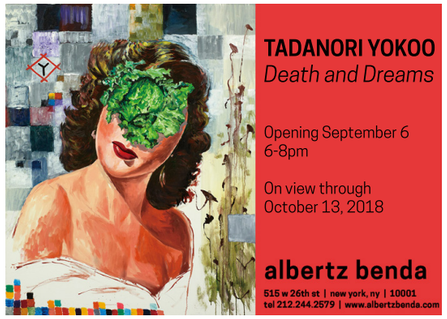
上｜1階会場風景　下｜地階会場風景
展示構成：HIGURE 17-15 cas

TADANORI YOKOO: Death and Dreams

アルベルツ・ベンダ（ニューヨーク）｜2018年9月6日–10月13日

ニューヨークでは、横尾さんの最新作に注目が集まっています。ここ数年、顔の一部が様々なオブジェによって隠された、謎めいた女性の肖像シリーズを制作してきた横尾さん。2018年に当館で開催した「横尾忠則の冥土旅行」展では、2017年から18年にかけて制作されたそれらのシリーズをまとめて展示しましたが、さらにその後描かれた最新作も加えて、アルベルツ・ベンダ・ギャラリーにおいてDeath and Dreams（死と夢）と題された展覧会が開催されました。

会場風景



TADANORI YOKOO: Death and Dreams招待状

会場入口では、やはり「冥土旅行」展に出品された1980年の《Back of Head》シリーズがお出迎え。最新作を予感させる顔の見えない女性像は、続く《落下する女》のシリーズにも引き継がれます。さらに奥に進むと、いよいよ最新作が登場。いくつもの“謎の女”たちが来場者を取り囲みます。

展示された作品はそのまま現地でコレクションされたものもあり、私たちの目に触れる機会が少なくなってしまうのは残念ですが、彼女たちもいつか“里帰り”してくれるはず。再会を楽しみにしています。

林優｜本館学芸員

Topics 02 最近の横尾さん

「いだてん」番組タイトル題字

『いだてん〜東京オリムピック噺〜』

いよいよ来月から放映が開始されるNHK大河ドラマ『いだてん〜東京オリムピック噺〜』。その番組タイトル題字とポスターデザインを横尾さんが手がけました。いだてん（韋駄天・仏法の守護神で足が速いといわれる）のイメージにぴったりな今にも走り出しそうな「足」がデザインされた題字と躍動感あふれるポスターです。

「いだてん」ポスター

『高松宮殿下記念世界文化賞30周年記念DVDブック』

高松宮殿下記念世界文化賞の30周年を記念して制作された『Art of our time vol.3 2009-2018』の表紙デザインを前回のリチャード・ハミルトンに次いで、横尾さんが手がけました。この賞は日本美術協会によって1988年に創設され、絵画、彫刻、建築、音楽、演劇・映像の各分野で、世界的に顕著な業績をあげた芸術家に毎年授与されています。横尾さんは、第27回の絵画部門を受賞されました。

『Art of our time vol.3 2009-2018』表紙

瀬古利彦 × 横尾忠則

『SWITCHインタビュー 達人達（たち）』

2018年12月1日、NHKにて放送された「SWITCHインタビュー達人達」の収録が当館にて行われました。横尾さんと元・マラソン選手の瀬古利彦さんとの対談です。収録は終始和やかな雰囲気で行われました。対談の一部模様は、SWITCH公式HPにて紹介されておりますので、ぜひご覧ください。

尾﨑幸恵｜本館学芸員補助

Column　インターンシップ＆博物館実習

毎年恒例となりました、神戸芸術工科大学のインターンシップと武蔵野美術大学・甲南大学の博物館実習、今年度も実施しました。

美術館へは展覧会鑑賞を目的に来館されるお客様が多いと思いますが、他にもたくさんの役割が美術館にはあります。インターン生・実習生も様々な業務に挑戦しました。

1

2

展覧会準備ではキャプション作成などに携わり、「在庫一掃大放出展」開幕に合わせアーカイブルームの展示替えや開架図書の整備もしました。資料調査では、公開に至るまで様々な段階の調査を経ていることを経験。作品資料に適切な保存環境を保つための、日常的な館内点検と清掃業務にも参加しました。ワークショップでは事前準備から当日対応、完成した参加者の作品展示やその返却準備まで。限られた期間ではありましたが、多くのことを吸収しようと取り組んでいる姿に、美術館スタッフも大いに刺激を受けました。

3

4

5

6

奥野雅子｜本館学芸員補助

1 事務所で作品資料に関する書類やデータの整理・登録作業
2 新しく開架図書コーナーへ加える書籍に、カバーをつけています
3 資料撮影にも挑戦。写真は検索システムや印刷物に使用します
4 アーカイブルーム内の清掃
5 ワークショップでは制作工程のデモンストレーションもしました
6 ワークショップ参加者の作品展示。バランスのよい空間になるよう試行錯誤

EVENT REPORT 01

「触れずに奏でるテルミンの音世界」

2018年7月28日〈土〉14:00–15:40 | オープンスタジオ（1F）
出演：濱口晶生（テルミン）、松井正樹（ピアノ）、藤平明子（カホン）、Mable and Da（マトリョミン・アンサンブル）他
協力: Mandarin Electron

テルミン四重奏

マトリョミン・アンサンブル "Mable and Da" の演奏

クラシックにポップス、さらには和太鼓や聲明（しょうみょう）まで、当館では様々なライブを開催してきました。今回は、なかなかライブでお目にかかる機会のない、世界最古の電子楽器「テルミン」と、その機能をマトリョーシカに収めた日本生まれの「マトリョミン」のコンサートをお届けしました。
プログラムは演奏とワークショップの二部構成で、第1部はテルミンの演奏で幕を開けます。1919-20年頃、ロシアの物理学者レフ・セルゲーエヴィチ・テルミン博士が発明したこの楽器の特徴は、本体に触れることなく、手を近づけたり遠ざけたりして音高と音量を調節するというマジックのような演奏方法。来場者は、その不思議な演奏風景に目をこらし、やさしい音色に耳をすましていました。
続くマトリョミン・アンサンブルのステージでは、十数名のメンバーがマトリョミンを操って演奏。環境に敏感な楽器ゆえ、奏者の個性が揺らぎとなって美しいハーモニーを生み出します。しかし、その様子は少々とぼけた可笑しみがあり、マトリョーシカが歌っているかのようなロシア民謡のメドレーに会場も盛り上がります。
第2部では、テルミン奏者でマトリョミンの開発者でもある竹内正実さんから説明を受けたあと、マトリョミンの演奏体験を行いました。不思議な楽器の秘密と奥深さに触れるイベントとなりました。

平林 恵 | 本館学芸員

EVENT REPORT 02

ワークショップ「自画像であそぼう!」

2018年7月26日〈木〉、27日〈金〉いずれも13:30–16:00
当館展示室、オープンスタジオ（1F）

上 | 展示室の中には不思議な自画像がいっぱい!
中 | カラフルな顔パーツがたくさんできました
下 | お友達と協力しつつ「福笑い」に挑戦

「横尾忠則　画家の肖像」会期中に開催された今回のワークショップは、夏休み期間中ということもあり、小学生を中心に2日間で44名の方にご参加いただきました。ワークショップでは、はじめに展示室にて横尾さんの多種多様な自画像をみてまわりました。不思議な自画像の数々にみんな興味津々の様子。作品鑑賞のあとは「横尾さんに負けないユニークな顔を描いてみよう!」とのスローガンのもと、今度は自分の顔を描くことに挑戦しました。展示室で様々なアイデアを吸収し制作されたみんなの顔は、肌や髪の色、顔のパーツの形まで個性豊かなものばかりです。
また、今回は顔をパーツごとに描いたあとで切り取ってもらい、それらのパーツを使って日本で古くから親しまれているあそびの一つ「福笑い」に挑戦しました。予想のつかないパーツ配置によって、さらにユニークな顔が出来上がっていきます。
あそびの後半では、もっと面白い顔づくりを目指して参加者のパーツをシャッフルし、再び福笑いに挑戦！びっくりするような不思議なパーツが当たってしまった人もいて、至るところから悲鳴や笑い声が響きます。あそびを終えて完成したみんなの顔は、横尾さんにも負けない（?）個性豊かで素敵なものになりました。

壁一面にみんなの個性豊かな顔が並びます

尾﨑幸恵 | 本館学芸員補助

Editors' Choice 01　アーカイブルーム

横尾忠則現代美術館で展示したことのない作品から出品作品が選出された「在庫一掃大放出展」に合わせ、アーカイブルームでも当館で未展示の、かつ展覧会出品作品に関連のある資料を中心に紹介しました。
横尾さんが手がけた雑誌の装幀は、例えば『話の特集』『週刊少年マガジン』『流行通信』などたくさんありますが、今回は、絵画的手法や写真の使用など様々な技法が駆使された『広告批評』（マドラ出版、1982-1985,1987年）、『月刊アーガマ』（阿含宗総本山出版局、1984,1987-1988年）に焦点を当てました。
『月刊アーガマ』について横尾さんは、「ぼくは、1980年代から絵を描くのが日課になっていた。いつも絵ばかり描いていたので、手に持っている筆で、その辺にある紙にさっと描くのが習慣になっていた。だから装幀にも自然と絵画的な作品が増えた」「絵の主題はパフォーマンス的なものが多い」と述べています（『横尾忠則全装幀集』パイインターナショナル、2013年、332頁）。画家宣言後、自らの表現を試行錯誤していた1980年代の横尾さんの制作の様子をうかがい知ることができる資料です。

『広告批評』『月刊アーガマ』表紙原画（一部）

奥野雅子 | 本館学芸員補助

Editors' Choice 02　ぱんだかふぇ　～展覧会スペシャルメニュー～

当館に併設され、開館当初から多くのお客様に美味しい料理と癒しの時間を提供している「ぱんだかふぇ」。当館職員もいつもお世話になっています。そんなぱんだかふぇでは、実は展覧会ごとにスペシャルメニューを提供していることをご存知でしょうか?
「横尾忠則　在庫一掃大放出展」では、本展ポスターデザインから着想を得たというウインナーコーヒーと提灯をイメージしたチョコレートカップをあしらった豪華デザートプレートが登場しました。「横尾忠則 画家の肖像」では、なんとポスターそのままに横尾さんの横顔が再現されたカフェモカが!
想像を超える多彩なメニューの数々には、いつも驚かされます。展覧会ごとに考案される素敵なメニューたちは、私たちにとっても楽しみの一つとなっています。
さて、次回展ではどんなメニューが飛び出すのでしょう? どうぞお楽しみに。

画家の肖像展 特別メニュー「画家のカフェモカ」

在庫一掃大放出展 特別メニュー
「デザートプレート」「ウインナーコーヒー」

尾﨑幸恵 | 本館学芸員補助